



夏休み研究会参加覚え書き

若松 克尚

京都に来てから約1年、就職後二度目の夏は少し精神的な余裕があったので、休暇を利用して研究会などに参加することにした。(たまたま、開催時期が近く、まとめて休みを取りやすかったこともあるが、帰省も兼ねての参加となった。)ここで、今回参加したワークショップ、研究会の内容と感想を述べたいと思う。(多分に主観が入っているので、いろいろな突っ込みもあるかと思うが、ご容赦ください。)

8/24 デジタル図書館ワークショップ@名古屋大学附属図書館

同ワークショップは、筑波大学主催で定期的で開催されている。

今回は、電子図書館国際会議の開催に合わせ、特別に名古屋大学で開催された。同会では、6件の研究発表がありコンテンツよりも技術よりの発表が主体となっていた。

発表タイトルは、以下のようになっており、WWW版「デジタル図書館」でも予稿集が公開されている。

- 1) 判決コーパスを用いた判決文の要約手法
- 2) XMLを用いた論文検索システム
- 3) オープンソースソフトウェア Greenstone による古いマニュスクリプトコレクションの開発 - Jawi 語 (マレーシア国立図書館) と日本語のケーススタディー
- 4) Web 上における仮想書架の試作と評価
- 5) 歴史写真研究のためのデジタルアーカイブの設計と構築
- 6) 地域図書館が発信する Web 上の電子化資料の主題タイプの分析

(次頁へ)

[目次]

夏休み研究会参加覚え書き	...	1
第36回全国大会(広島)報告2	...	3

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール: dtkk@rg7.so-net.ne.jp (大学図書館問題研究会京都支部)

URL: <http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm>

なかでも私の興味を引いたのは、仮想書架の試みであった。これは、OPAC 上での検索と図書書の背表紙画像をリンクさせ、検索結果を仮想書架として表示する試みである。ここで面白いのは、単純に検索した結果を仮想書架として並べるだけでなく、同著者のものを並べたり、同請求記号のものを並べたり、出版社や出版年の同じものを並べたりと実際の書架では不可能な「さまざまな見せ方」が一度にできることである。

実際に運用するとなると、著作権などの問題があり大変だとは思いますが、某書で図書館の傲慢さが指摘されたこともあるので、実現できるとうれしいものである。

8/25 電子図書館国際会議@名古屋大学野依記念館

8/26 電子図書館国際会議@名古屋大学野依記念館

こちらについては、赤澤委員、井上委員も参加した。内容などの詳細については井上委員より前号にて報告があったので、そちらに譲ることにする。

8/27 TP&D フォーラム@グリーンホテル神戸

「TP&D フォーラム (Technical Processing & Documentation Forum)」は、全国各地の整理技術・情報管理等に問題意識を持つ研究者・実務者が集い、研究成果を発表し、議論を闘わし、そして交流を深める場を提供するというを目的として 1991 年に始まった会である。

研究会の性質上、発表は整理技術関係が中心ではあるが、それのみにとどまらず、年々幅広い内容の発表、内容の濃い議論が行われている。

私自身の参加は、名古屋での開催に続き、二度目である。前回参加した名古屋の会では、修士論文の関係があり筑波大学の宇陀則彦先生の「図書館サービスの進化と電子図書館システム—電子図書館は資料の電子化だけにあらず」という発表に興味の主眼があった。

一方今回は、目前に抱えているものがなかったため、かなり気楽に参加できた。二日にわたるこの研究会で行われた発表は以下の三点である。

- 1) デジタル環境下における教育情報資源の組織化に関する一考察
～継続資料の書誌階層を手がかりに～
- 2) 情報探索における自己効力感の役割
- 3) ビブリオメトリクスにおける標本量依存性の問題
：論文生産および引用の集中度分析を事例として

1 日目となるこの日の発表は、梅花の村上泰子先生とメディア教育開発センターの三輪眞木子先生であった。

村上先生の発表は教育情報資源を組織化する際の指標などに関する内容だった。とくに E-learning との絡みから従来の書誌階層の枠にはまらないものをどのようにまとめ、組織化するのかというところに視点がある発表だった。

三輪先生の発表は、御著書である「情報検索のスキル」でも言及している内容のものだった。自己効力感(=経験に基づいた、自分で「できる」という気持ち)がどのように、情報探索行動に影響を及ぼすのかということに主眼がおかれていた。情報探索行動のさまざまなモデルの紹介や、自身の作成された情報行動文法モデルの紹介などもあった。

この手の話は、学生の頃から興味があった内容ではあるが、自分では追求してこなかったところでもある。ただ、現在図書館で仕事をし、学生に情報検索のガイダンスをする時などに役立つようなものでもある。

研究発表終了後に、夕食を兼ねた懇親会が開催された。さらに、夜中まで懇親会の二次会が開催され、杯を交わしながら濃厚な議論が行われた。前回も感じたことだが、研究発表の場だけでなく、宴席でも熱い議論がかわされるのもこの会の特徴のようである。

8/28 TP&D フォーラム@グリーンホテル神戸

この日の発表者は、大学評価・学位授与機構の芳鐘冬樹先生であった。

計量書誌学の研究をされているが、私自身苦手で、あまり深く追求してはいなかった。ただ、今回の内容は通常統計などでは見落とされがちな「統計で見えてこない部分」に注目した発表でおもしろかった。(難しかったけど。)

5日間に渡り、名古屋から神戸に移動して研究会に参加することができた。この間、知的刺激を多く受け、(若干許容量を超えた感はあるが)自分でも研究活動を再開したい気持ちも出てきた。非常に内容の濃い夏休みであった。

わかまつ かつひさ (京都造形芸術大学芸術文化情報センター)

第36回全国大会(広島)報告2 - 「危機管理」分科会に参加して -

辰野 直子

全国大会の課題別分科会は、「危機管理」分科会に参加した。この分科会では、私自身も、所属する図書館での浸水事故について報告させて頂いたが、ここでは、稲葉洋子氏(国立民族学博物館)による講演「震災記録を災害対策に活かす」を拝聴して、その内容と感じたことを記してみたい。

稲葉氏の講演の内容は、(1)10年前の阪神・淡路大震災時の神戸大学附属図書館での体験、(2)「震災文庫」に立ち上げから携わった経験、そして(3)それらの経験を現在の勤務先である国立民族学博物館においてどう活かしているか、というものであった。

まず、(1)阪神・淡路大震災時の神戸大学附属図書館での体験である。

図書館の被害は、書架の倒壊、図書の落下・散乱などであり、「震災文庫」ホームページ <http://www.lib.kobe-u.ac.jp/eqb/index.html> ではその際の写真も見ることができる。

大学は、職員や学生の安否確認に追われると同時に、避難所となって被災者の支援も行なわねばならなかった、というお話を伺いながら、災害時の大学の役割というものをあらためて考えさせられた。また、図書館では、復旧作業を行ないながらも、地震の2週間後には開館し閲覧室を一般に開放したということで、職員の方々の苦労はたいへんなものであったと想像された。

次に(2)「震災文庫」に立ち上げから携わった経験である。

震災文庫を立ち上げるきっかけとなったのは、学外からの「今回の地震に関する資料を網羅的に見られるところはないか」との間合せだったという。まずは市販の図書の収集から始めたが、それだけでは「網羅的に収集する」ことにはならない、それだけでは震災の全貌がつかめないのではないかと、という思いから、図書以外の資料にも対象をひろげていくことになる。ボランティア団体の作成したチラシなどの1枚もの資料、写真、録音資料等、通常の流通ルートにのらない資料である。放っておけばその存在すら公に知られることなく消えていく資料をどうやって収集するのか。その方法は、たとえば、新聞記事から情報を得て住所を特定し寄贈依頼を出す、自分の足で官公庁をまわってPRをするなどであるという。通常の

資料収集業務とは異なり、とても地道な方法であると感じた。また、NGOに協力を依頼したことが結果として貴重な資料の収集につながったというお話もあり、図書館以外の機関への働きかけ、ネットワークを構築することの重要性も感じられた。

こうして、地震の半年後には、収集した資料のリストがホームページで公開された。そこには、一般市民に、どのような資料があるのかを認識してもらい、どのような資料であれば寄贈してもよいか判断基準を持ってもらう意図もあったそうである。その後、「震災文庫」は成長を続け、ホームページでも写真や音声等も含めた「震災文庫デジタルギャラリー」として公開されていることは、よく知られているとおりである。

この「震災文庫」については、稲葉氏の著書『阪神・淡路大震災と図書館活動：神戸大学「震災文庫」の挑戦』（人と情報を結ぶWEプロデュース、2005）に、詳細が著されている。10年前に立ち上げられた「震災文庫」が幾度も業務の見直しを経て今に至るまでの活動が、資料収集や資料の保存や管理方法のノウハウとともにあらわされており、非常に興味深く拝読した。

最後に、(3) それらの経験を現在の勤務先である国立民族学博物館図書室においてどう活かしているか、である。

まず、ガラスに飛散防止フィルムを貼る、書架を固定する等の耐震対策をしているとのことである。また、週に一度、職員が交代で図書室内の安全性を点検しているということであった。実際に点検の際に使うチェックシートを見せて頂いたが、その項目は、防火扉や消火栓の前に物が置かれていないか、通路が確保できているか、非常口に備え付けられた懐中電灯が使用可能か、など詳細なものであった。重要なのは、一部の者ではなく職員全員が（交代で）点検を行なうことであり、そのことが情報や意識の共有に役立っているそうである。確かに、全員の防災に対する意識を高めるためにも有効な方法であると感じた。

課題として、実際に仕事に災害が起こった場合にどうするかという事が挙げられていたが、これはどこの図書館においても共通の課題である。まず、利用者の安全確認、安全の確保を行なわねばならないし、職員の安全確認や安全確保も必要となる。また、図書館内の被災状況を確認し、被害がひろがらないような措置をとることも必要になる。

まとめとして稲葉氏が強調しておられ非常に共感できたのは、職員同士のネットワークに加え、日頃から館外（専門家との）ネットワークを組んでおくことの大切さである。被災調査に使われた地図の保存、資料の脱酸処理、水損した紙資料の救済等、実際に館外ネットワークが活かされた例が紹介された。その中には、震災時に構築したネットワークが活かされた例もあったそうである。

稲葉氏のお話は、ご自身の体験に基づくものであった為、全体として非常に説得力をもつものであった。また体験から得られたことをその後に活かしておられる姿勢が、お話の随所から感じられた。災害対策や防災の意識は、何か事が起きてしばらくは高まっても、しだいに薄れていきがちである。冒頭少し触れたように、私の職場でも昨年末に浸水事故があった。お話を伺いながら、自分は、自分の職場では、その経験がその後しっかりと活かされているだろうかということを考えさせられた。

全くの余談ですが、阪神・淡路大震災時、私は西宮市に住んでおり、ごく僅かですが避難生活も経験しました。お話を伺いながらその当時のことを思い出し、その頃は自分が将来大学図書館で働くことになるとは考えもしなかったなあと思ったりもしました。10年は短いようで長く、長いようで短い・・・。

たつの なおこ（京都大学人間・環境学研究科総合人間学部図書館）